

書家・立石光司の軌跡

たていし みつじ

「企画展「立石光司遺作展」」

現在、古河歴史博物館では、平成14年（2002）に逝去された書家・立石光司氏の遺作展を開催しています。

昭和2年（1927）古河に生まれた光司氏が、はじめて書の手ほどきを受けたのは、父・立石榮太郎氏からでした。その様子について、同氏は『古河の剣道』（古河市剣道連盟発行）の中で次のように記しています。

四才になると、父は私に筆と竹刀を持つよう命じた。筆で文字を書く事は大変づらかった。どんな寒い日でも畳や足袋をよごさないよう、素足で廊下に座らせられた。用紙は新聞紙である。かじかんだ手に大きな筆は持ちにくい。その上父は、竹刀を持って側らに立っている。書く字が誤ったりまがったりすると、竹刀が飛ぶのである。

昭和8年（1933）古河市を代表する書家のひとり大久保翠洞氏に入門しますが、幼い頃からの厳しい修練のためものでしょう。同18年（1943）16歳で、興亜書道連盟展青少年の部において内閣総理大臣賞を受賞しました。

昭和24年（1949）より、現代書のパイオニア的存在で、のちに文化功労者となる手島右卿氏に師事し、同27年（1952）独立書道会創立に参加、会員となります。その後も独立書人団副理事長、毎日書道会評議員、また、日本書道専門学校教授、東京芸術大学美学部講師を務めるなど中央書壇

で活躍、後進の指導に当たりました。



立石光司「九品念佛」

郷土古河においても、古河市文化協会理事を務め、書道団体・鳳龍会を設立、文化振興の指導的役割を果たします。平成3年（1991）には日本最初の専門美術館「設立を提唱し、同美術館の協議会委員長として終生運営に関わりました。幼少で筆を握り、75歳で亡くなるまで書芸文化の発展に尽力した氏の人生は、まさに書とともにあったといえるでしょう。

本展覧会では7歳から最晩年に制作された作品約60点を紹介、氏の多彩な書業をたどります。（同展は2/24まで）

古河街角美術館学芸員

倉井 直子